渋谷本町スタイル

日常の授業における共通の取組として、本校では「**渋谷本町スタイル**」を取り入れている。これは、一時間の授業を「**ねらいの提示**」→「**考える**」→「**学び合う**」→「**まとめる・振り返る**」という流れを基本に組み立てるというものである。

各授業においてこのスタイルを積み重ねることで、常に思考力や判断力、表現力等を育てる授業を展開し、それぞれの力を高めることができる。さらに、児童・生徒が学習の流れをつかみやすく、積極的に授業に参加することができるという効果もある。

3年音楽科

単元名　拍の流れにのろう

- ねらい：・曲想を生かした演奏をするためにはどのような工夫をすればよいか考え、伝え合うことができる。
- 考える：・曲想を生かした演奏をするためにはどのような工夫をすればよいか、考える。
- 学び合う：・歌ったり演奏したりしながら、演奏の工夫について伝え合う。
- まとめ：・伝え合った工夫を演奏に生かすことができる。

9年理科

単元名　遺伝の規則性と遺伝子

- ねらい：・遺伝子検査の積極的な普及を支持するか否かについて、自らの主張とその根拠を、科学的かつ論理的に表現することができる。
- 考える：・課題の肯定・否定の両方に関して、その根拠を考え、互いに問答し、自らの主張の論理の妥当性を高める。
- 学び合う：・討論を通して、他者の考えを自らの考えと比較しながら思考の幅を広げ、問題を掘り下げる。
- まとめ：・主張の根拠が事実に基づいたものであったかを検討し、遺伝子検査の利点と予想される問題点を明らかにする。

特別支援学級(F組)社会科

単元名　世界の国々

- ねらい：・新聞・補助説明・写真などを用いて相手に分かりやすく伝えることができる。・他の班の発表を良いところを探しながら聞くことができる。
- 考える：・新聞を作り、調べた内容を発表する。発表を聞くときは、シートにメモを取りながら聞く。
- 学び合う：・班の発表が終わるごとに質問と感想を述べ、友達の意見を聞く。
- まとめ：・発表会の感想を述べる。

ねらいの提示

考える

学び合う

まとめる・振り返る

言語環境部

言語環境部の概要

昨年度、本校は小中一貫教育校として開校したことで、新たに「学園」という意識が児童・生徒自身の中にも芽生えた。そこで、本研究においても新しい集団の中での児童・生徒の実態把握をした。教師による客観的な評価や本校独自の「言語にかかわる意識調査」の結果より、とりわけ、聞く・話す力については課題があることが分かった。

そこで、言語環境を整えるという視点から、子供たちが豊かに表現し合える力が身に付くよう、次のような手だてをとることとした。

【渋谷本町学園の言語活動に関する児童・生徒の実態】

- 表現しようとする意欲がある。
- 話の聞き方・話し方に課題がある。
- 表現するための語彙が少ない。

【目指す児童・生徒の姿】

- すすんで自分の考えを表現する。
- 聞き方や話し方の態度や方法を身に付け、自信をもって伝え合う。
- 語彙を豊かにし、生活や学習の場面で活用する。

全校スピーチ活動

全校共通の話し方・聞き方教室掲示

校内学年掲示

全校スピーチ活動

常時活動として、全学年でスピーチ活動に取り組んだ。毎日、少人数で実施し、学級全体に思いが伝わるように話す力や、相手の伝えたいことをもらさずに聞く力を育ててきた。

初期のスピーチ活動は学年に応じた目標を設定して行うだけであったが、現在はこれに全校共通の話し方・聞き方の教室掲示の目標も加え、１学年から９学年までを貫く柱をもって行っている。スピーチ活動に繰り返し取り組むことで、相手に伝わる声量で聞き手を見て話したり、自分の思いや知識と比べながら聞いたりする力が高まってきた。

学年に応じた目標 ＋ **話し方・聞き方の教室掲示の目標（学校共通）**

～活動例～

初等部　1学年「一番〇〇だったこと」

内容　遠足での出来事の中で、自分が一番〇〇だと思ったことをひとつ決めて話す（「朝の会」に日直２名ずつ実施）。

話型やモデルを示し、話すことに慣れさせる。同じ体験をしても、感じたことが様々にあることに気付き、楽しみながら聞くことができた。

話型にそって楽しみながら

2学年「春をみつけよう」
春に関連する言葉を探し、言葉と見付けた経緯を発表する。

3学年「よい聞き手になろう」
話の中心に気を付けて聞き、質問したり感想を述べたりする。

4学年「山中移動教室について」
心に残った思い出と理由や、高学年の宿泊行事に向けての思いを伝える。

中等部　6学年「今日のお題はこれだ！」

内容　児童の希望から決めた複数の話題から、前日に話題を決める。話の内容や構成を考え、１分間以上のスピーチをする。質問や感想を考えながら聞く。

児童が決めた話題なので関心があり、質問や感想を考えやすく、徐々に生活の中から伝えたい話題が自分でつかめるようになった。

ある程度の長さで
質問・感想を考えながら

5学年「さいころスピーチ」
サイコロの出た目のテーマで日直がスピーチする。

７学年「本日の反省」
日直や学級委員が一日の生活や学習の様子を振り返りスピーチする。

高等部　8学年「1日を振り返って」

表現を工夫して　ふさわしい言葉を使って

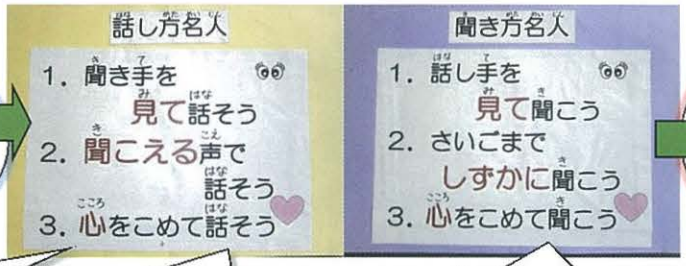
内容　その日の出来事に、反省や感想を織り込んで伝える（終学活に日直１名）。話し手は、具体例をあげて分かりやすく話す工夫をする。聞き手は、肯定的な態度で受け止める。生徒に獲得させたい語彙の一覧表を活用することで、使える語彙を増やした。

９学年「1分間スピーチ」
聞き手が関心をもてる話題を選択し、最後まで聞けるような展開を工夫した構成を考える。

全校共通の話し方・聞き方教室掲示

児童・生徒が、学習内容を定着させたり、考えを広げ深めたりするには、人の話を聞く・話す態度を身に付けさせることが大切であると考えた。そこで全教室に「話し方名人」、「聞き方名人」のポスターを掲示した。その際に、ただ掲示するのではなく、なぜこのように話すことや聞くことが大切なのかについて考えさせる時間をもち、自主的に取り組めるようにした。また、「心をこめて話そう」「心をこめて聞こう」の項目については、各学年の発達段階に応じた指導を行っている。

話の聞き方・話し方が分からない。自信がない。



速さや間に気を付けて

事実と意見が分かるように

自分の考えと比べてうなずきながら

友達の話を聞いて考えが広がった。安心して伝えられる。

校内学年掲示

校内の環境整備の一つとして、言語活動を意図的に掲示物に位置付けた。校内の掲示板を総点検した上で、校内掲示板を活用し、各学年の「言葉の力」を育むための活動紹介を行った。スピーチ活動の様子や読書環境の整備、語彙を増やす工夫、話合いの際の留意点など、学年に応じて取り組んでいることを掲示した。これによって、児童・生徒は１年生から９年生までの異学年の活動の様子について学び合い、「言葉の力」を育む活動に興味・関心を高めることができた。また、保護者や地域に対しても、本校の取り組みを伝える機会になった。

校内掲示を見直そう！
- 校内から言語環境を整備
- 情報を共有する効果的な掲示計画

２学年掲示板

読書活動部

取組の背景

文化庁の国語に関する世論調査によると、１か月間に本を「読まない」と回答した割合は、全年齢平均で３７．６％（２００２年）から４６．１％（２００９年）に増加している。また、２０００年のＰＩＳＡ読解力テストでは、本を読む意欲が高い者、読書時間の長い者、図書館の利用頻度が高いほどテスト結果は良い傾向にある。さらに、本校では学年が上がるにしたがって図書館の利用率が下がる傾向が見られた。このことから、本校では読書活動の活性化を図るとともに、読書活動の中に言語活動を取り入れ次のような手だてをとることとした。

児童・生徒の実態

■物事を柔軟に考えることが苦手である。
■深く考えずに判断する傾向がある。
■表現するために語彙が不足している。

課題解決のための取組

■学校図書館の活性化
　学校における「資料・情報センター」としての機能を果たす。

■朝読書の充実
　読書習慣を身に付け、情操を豊かにするとともに、言葉の力を育成する。

■読書旬間の充実
　読書体験を様々な手段で伝え合うことにより、興味・関心を高めるとともに、習得した言葉の力を活用する。

読書活動部 研究の概要

①本校の児童・生徒の実態調査

②他校の読書指導状況調査
（渋谷区教育研究会の調査を活用）

③先進校の取組の分析

【方針】　これまでやってきたことを
確実に　深く　改善しながら
実施する

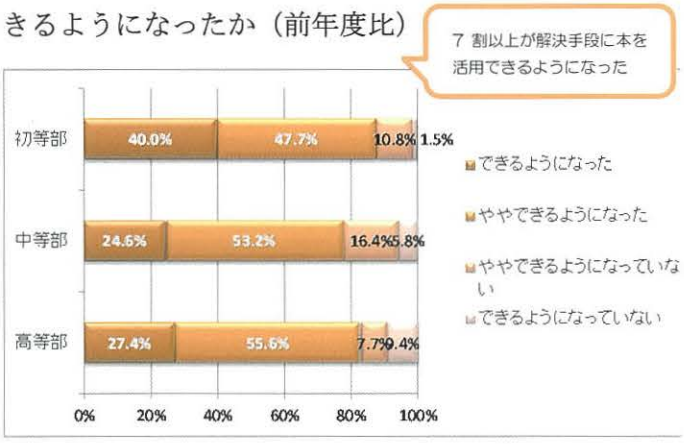
④「学校図書館」「朝読書」「読書旬間」の３部会による研究推進
→１部会４名で構成（担当の明確化）
→小中の教員をバランスよく配置（連携の強化）

データ

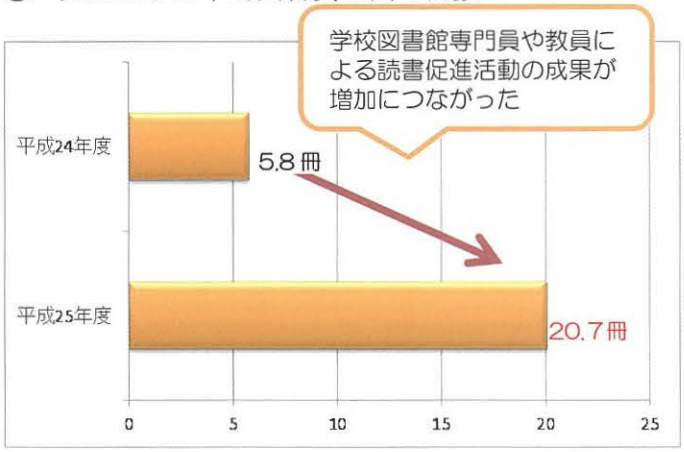
＊①②＝言語に関する児童・生徒アンケートより
＊③＝本校図書館４月～７月貸し出し数より

①読書意識調査（前年度比）

②日常生活上の課題を解決するために、本の活用ができるようになったか（前年度比）



③一人あたりの平均図書貸し出し冊数



具体的な取組

ACTION1　学校図書館の活性化

①学校図書館専門員が常駐し、学校図書館運営や地域図書館との連携、学校図書館使用オリエンテーション、授業でのＴＴ、図書委員会指導、図書ボランティアと連携した図書整理、読み聞かせ、読書指導などを実施した。

②各教科、総合的な学習の時間等における学校図書館活用の指導計画（１年～９年）を作成した。

③各学年及び教員による学校図書館利用割り当てを作成し、学校図書館の利用の活性化を図った。また、季節や行事を生かした室内レイアウトを工夫し、児童・生徒が「学校図書館で本を読みたい」と思う環境整備を行った。

④児童・生徒に、図書紹介のポップ等を作成させ、学校図書館内に掲示した。

ACTION2　朝読書の充実

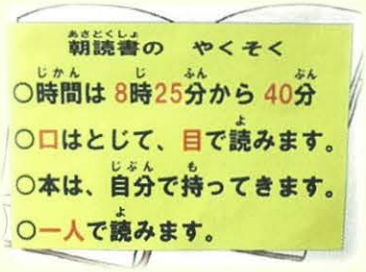
①発達段階に応じた朝読書の目的を設定した。

初等部（1.2 年）	初等部（3.4 年）	中等部	高等部
・楽しんで読書しようとする態度を育てる。 ・1～2日で読みきれる本を自分で選んで読もうとする。 ・本の題名と登場人物や面白かった場面を友達に伝える。	・幅広く読書しようとする態度を育てる。 ・3～4日で読みきれる本を継続して読もうとする。 ・面白かった場面や、印象に残った場面を相手に分かるように伝える。	・ものの見方や表現の仕方に親しんで読書しようとする態度を育てる。 ・1 週間程度で読みきれる本を継続して読もうとする。 ・内容を短くまとめて、相手に分かるように伝える。	・読書を通して、考えを広めたり深めたりしようとする態度を育てる。 ・目標をもち、自分の読みたい本を探して読もうとする。 ・相手が読みたくなるように、表現を考えて伝える。

②「朝読書のやくそく」を教室に掲示し、児童・生徒に周知するとともに、全学級で指導した。また、学級担任も児童・生徒とともに読書することにより、学級全体が読書に没頭している状況をつくった。

③小学校は木曜日、中学校は金曜日に、読んだ本の内容を紹介することにより、互いに読書の幅を広げるとともに、自ら伝えたいことを見付けて表現する力の向上を目指した。

④地域図書館から定期的に図書を借りて学級文庫を充実させ、児童・生徒が手軽に読書する環境をつくった。



ACTION3　読書旬間の充実

①読み聞かせ
- ○図書委員会の中学生は小学生に、小学生高学年は小学生低学年に、読み聞かせをした。（５月、１０月、１２月実施）
- ○図書ボランティアが小・中学生に読み聞かせをした。（年３回　６月、１１月、２月実施）
- ○昼の放送で放送委員会が読み聞かせをした。（通年）

②読書旬間
　読書感想カードを作成し、好きなフレーズ紹介や一言感想を書いた。また、読書カードを活用して学校図書館に掲示し、児童・生徒が互いに観賞し合えるようにした。

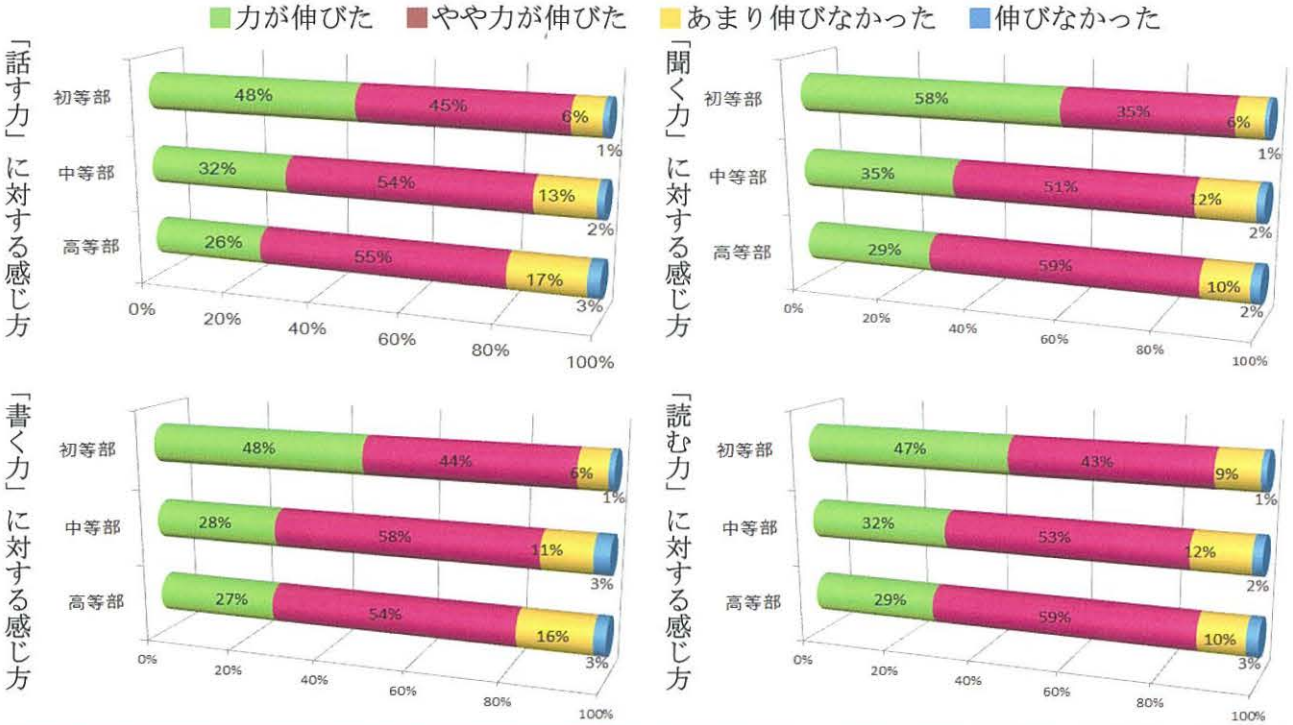
③その他
　地域で活動するボランティアによるお話会を開催した。本や道具を使わずに語り手が聞き手にストーリーを語る「ストーリーテリング」という手法を用いて実施した。

言語にかかわる意識調査

◆学習や日常生活における様々な言語活動の工夫によって、児童・生徒が、自分の「言語に関する力」や、「生活習慣」の変化についてどのように感じているのかを調査した（平成２５年度９月）。
　その結果、８０％の児童・生徒が自身の「言語に関する力」について、「力が伸びた」と感じており、９０％の児童・生徒が、挨拶や身近な人とのコミュニケーションが「できるようになった」、８４％の児童・生徒が、読書量の増加やＴＶニュース・新聞等のメディアに触れることが多くなったと感じていることが分かった。
◆言語活動の工夫が、児童・生徒の力や生活習慣に対する自己評価に対し、前向きに影響したと考えられる。一方で、児童・生徒が苦手意識をもっている活動内容等も明らかになった。

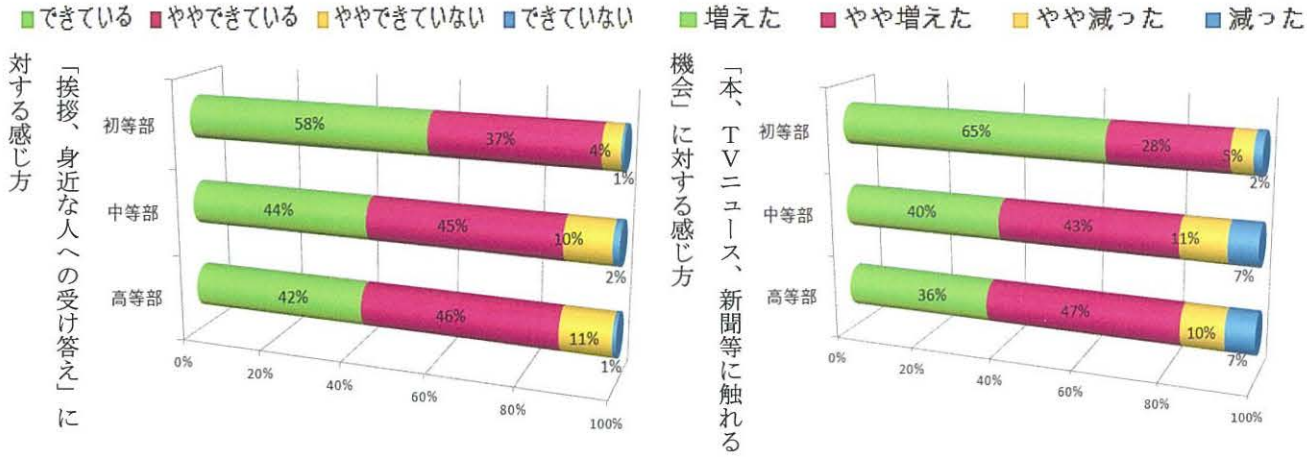
【言語に関する力について】

※以下のグラフは、設問の属性ごとに回答を集計した結果である。



◆初等部から高等部まで共通して、特に「他者の話をよく聞く」力が伸びたと感じている児童・生徒が多かった。一方で、初等部・中等部では話の中心を読み取り、それを自らの考えと比較する活動に一部苦手意識が見られた。高等部では、自らすすんで考えを表すことや、その際に構成や話し方を工夫することに課題を感じていることが分かった。

【生活習慣について】



研究の成果と課題

＜成果＞

○小・中学校の全教員が各年度一人１回研究授業を実施し参観し合ったことで、小学校と中学校の授業内容や授業形態などについて理解し合い、教科ごとの９年間のつながりを意識して授業改善に取り組めた。

○小・中学校合同の教科部会において、思考力・判断力・表現力を育成するための授業検討をしたことにより、中学校の専門性や小学校の指導方法等を相互に活かしながら授業改善をすることができた。

【思考・判断・表現正答率「児童・生徒の学力向上を図るための調査」都平均との比較　東京都教育委員会より】

	平成２４年度	平成２５年度
小学校５年生・理科（都平均比較）	５６．９％（－４．１％）	５２．２％（＋１１．０％）
中学校２年生・数学（都平均比較）	３９．５％（－１５．６％）	３８．８％（＋４．４％）

○話し方と聞き方を全校で統一し分かりやすく掲示し、授業や日常生活において繰り返し指導することで、児童・生徒が意識して話したり、聞いたりするようになった。

○全学級で繰り返しスピーチ活動に取り組むことにより、人前で話すことに対する抵抗感が軽減した児童・生徒が増えた。また、話の順序や話型等を意識させることにより、相手を意識して分かりやすく話す工夫ができるようになってきた。

○日常的に朝読書に取り組むことにより、児童・生徒に読書習慣が定着し、読書についての興味・関心が高まり、読書量が増えた。

○学校図書館や地元の図書館の本を教室に置いたり、保護者や地域の団体や上級学年による読み聞かせをしたりすることにより、児童・生徒の読書の幅を広げることができた。

＜課題＞

△各教科における９年間の系統性を意識した指導については、指導方法や内容についてさらに検討し、深めていく。また、今後も児童・生徒の実態把握を継続し分析・検証する。

△スピーチ活動においては、系統性を意識することや各学級の題材・方法等について情報交流することで、内容を一層深める。

△読書活動においては、発達段階ごとの目標と手だてをさらに意識させ、図書委員会等を活用し児童・生徒相互におすすめの本を伝え合ったりするなど、自主的な活動を活性化させ充実を図る。

△研修で得た成果を基に言語活動の更なる充実を通じて、学力向上の対策を具体的に設定して実践する。

教職員合同の研究協議会

教職員合同の研究授業

おわりに

渋谷区立渋谷本町学園　副校長　山本 茂浩

平成２１年４月、現在の渋谷本町学園の基礎である母体校３校において、９年間を見通した各教科のカリキュラムづくりや行事の検討をはじめ、先進校の研究や他校での小中連携の実践を学びながら、主として「一貫教育校の運営」という視点からの研究が始まりました。

平成２３年４月には、母体校のひとつである本町中学校が東京都教育委員会言語能力向上推進校の指定を受け、言語活動の充実という点からの研究に焦点化しました。さらに、新設校として再出発した平成２４年４月からは、渋谷区研究指定校の指定も受け、現在に至っています。

本校の研究の基幹は、１学年から９学年までの期間における、全ての教育活動を通じた言語活動を充実させること、そしてその系統性を確立するというところにあります。日常の授業では、そのねらいを達成させるために、児童・生徒の実態や発達段階に応じた様々な言語活動を意図的、計画的に取り入れるとともに、学級活動や各種発表会等におけるプレゼンテーションの工夫を通して、言葉によるコミュニケーション能力の向上を目指してきました。発言意欲や内容の向上、言葉の発し方など、児童・生徒に変容が見られるようになったのは嬉しいことです。さらに、学校全体の学習環境を整備し、初等部・中等部・高等部といったくくりでの系統性を明らかにできたことも、教職員にとって、大きな指針となりました。

今後も引き続き本研究に沿った実践を積み重ねることや、そこから生じる新しい成果と課題を吟味し検討していくことで、渋谷本町学園独自のカリキュラムの策定と児童・生徒の言語の力の更なる向上を図っていく所存です。また、小・中教職員が理解を深め、学校としての一体感を高め、相互に磨き合う組織体となる学校を創るよう努力して参ります。

終わりになりましたが、本研究を進めるにあたり、３年間継続してご指導くださいましたILEC言語教育文化研究所代表理事、東京女子体育大学名誉教授　尾木　和英先生、このような機会を与えてくださいました東京都教育委員会、渋谷区教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

平成２５年度　研究に携わった教職員

統括校長　樋口　郁代

小学校

副 校 長　横山　公一
副 校 長　猪刈　恵美子
主幹教諭　佐藤　雅彦
主幹教諭　中垣　知美
主任教諭　堤　　敦子
主任教諭　那須　史樹
主任教諭＊小木　和美
主任教諭　荒井　浩子
主任教諭　長島　寛和
主任教諭　駒井　祐紀子
主任教諭　五十﨑　博子
主任教諭☆小山　春苗
教　　諭＊上田　郁子
教　　諭　田中　満理子
教　　諭　山﨑　志帆
教　　諭　佐藤　亮輔
教　　諭＊髙木　優
教　　諭　吉田　知美
教　　諭　眞島　育
教　　諭＊井上　祐子
教　　諭　小嶋　美穂
教　　諭　沖　　尚子
教　　諭　永井　和貴
教　　諭＊小岩　雅行
教　　諭　山際　剛
養　　護　藤井　朗子

中学校

副 校 長　山本　茂浩
主幹教諭＊大林　博
主幹教諭　谷上　由美子
主幹教諭　中村　泰夫
主幹教諭　羽立　朋代
主任教諭　岡野　泰雄
主任教諭　岡戸　三佳
主任養護　吉野　綾子
教　　諭　松本　洋平
教　　諭　今井　謙太郎
教　　諭☆田中　将一
教　　諭　田代　憲一
教　　諭＊若松　麻美
教　　諭＊石橋　晋介
教　　諭　若林　満雄
教　　諭　飛内　克悠
教　　諭　峯　　忍
教　　諭＊髙木　翔平
栄養教諭　細野　清美

＊印は、研究部員　☆印は、研究主任を表す。